

勉強思考、研究思考、学問思考。

雑感。

	勉 強	研 究	学 問
構 え	どこかに 答えがある	クリアすべき 目的がある	問いと化す (黙って生きる)
表現手法	テストで点をとる 資格に合格する	論 文	生き様 (よう)
行動原理	達成の追求	意味、意義の追求	普遍 (大常識) の追求
必須事項	対 象	資 金	時間 (しかない)
立 場	受 動	客 観	主観 (しかないという覚悟)
営 み	覚える	究める	悟る (に近い)
専門分野	あり	あり	(つまるところ) 無し
仕事観	—	職 業	(いじでも) 本分
教育方法	指 導	例えば カリキュラム	(しいていうなら) 徒弟的

勉強と学問の違いって何？

かつて、筆者は、高校生むけに下記のような文章を書きました。

現役高校生のあなたがしている「勉強」と、大学でする「学問」とはまったく性格が異なります。一言で言うなら、問題を解くという作業と問題を生むという営みの違いです。

「問題を解く」とは、文字どおりのこと。「問題を生む」もまた文字どおり。であれば、勉強と学問の違いについての議論のきっかけとしては、その「問題」とは何かを考えたくくなります。もったいぶるまでもなく、その違いは答えがあるかないか、にあります。勉強では答え（＝正解）のある問題を解くが、学問では答えがない問題を生む。

答えがない問題は、問題として不適當であり問題として成立していないとも言えます。しかし、“人生の選択”に答えがないように、答えや正解がない問題も多々あります。多々あるというより、我々の生き死ににおいてすべてが答えのない問いであり、その全体のなかから個別で完結する問題を作ったものが、勉強における問題、というほうが正しいでしょう。臼から引き上げた大きな餅を小さく引きちぎって、食べられる問題にしているのです。食べられるように小さくしているのだから、そりゃあ食べることができます。現代ではいまのところ、そういう問題を解く作業により人間が賢くなると信じており、いまのところそのような制度を社会に入れているという次第でしょう。上で、さらっと「我々の生き死ににおいてすべてが答えのない問いである」と書きましたが、これを違和感なく読める読めないで人は別れます。優劣をつけたいのではなく、ただそうであるというだけです。そして同時に、歳を重ねた人、様々な経験をした人、自分の死をむかえそうな人らは、総じてこの一文に違和感を持たないというのもまたそうです。多くの古典、詩、歌がそう教えてくれています。

この世のいかなる問題も、人間が持って生まれた感性にしたがって素直かつ素朴に考える（子どものように、と言ってもいいかもしれない）ことを止めなければ、必ず行き着く問いがあります。答えではなく、問いに行き着く。いまさら改めていうまでもなく、それはなぜ生まれたのか（なぜ存在しているのか）というあの領域の問いです。

今日は何を食べようか → なぜ腹が減るのか → なぜ食べようとするのか → なぜ生きようとするのか → なぜ死にたくないのか → そもそも生まれているのか

答えようのない問いが生まれ、それには答えはない。このような、言葉（＝意識）をもった動物にとって、ただ生きる（ただ死ぬ）のではなく、そもそも何なのかをどうしてもどうしても考えてしまうという根源的な営みを広く「学問」としたいです。

研究と趣味との違いは？

例えば、昆虫の研究者と昆虫マニアとの違いはどうか。学術研究の形式に則っているとか、論文で発表するとか、高度な研究装置を使っているとか、そんなことは違いにはあたりません。それはあくまでも単なる外形的な違いにすぎない。それに、昆虫が趣味の人だって書こうと思えば論文は書けます。いったい昆虫の研究者と昆虫マニアの根本的な違いはどこにあるのでしょうか。もっというなら、前者にだけ国費が投入され、研究者の興味・関心を推進するのはなぜでしょうか。

それはおそらく両者における興味・関心の「性質」が異なるのです。趣味のほうはえてして続ければ続けるほど広く、あるいは細かくなっていく。例えば、やっとこの珍しい蝶を捕まえることができた！とか、あるいは、この蝶とこの蝶はすごく似ているけど生息地域は違うとか。そういう特定の事柄に対して物知りであること、博学であることが趣味の醍醐味であるようにみうけられます。鉄道マニアをイメージすればわかりよいでしょう。

一方、大学での研究はその逆。進めれば進めるほど「深く」なります。研究者は、収集や情報獲得というよりむしろ原理や法則に関心があるのです。例えば、その蝶はなぜそのような生態系をもつに至ったか、なぜそのような生息域の分布になったのか、そのようになったのにはどのような理由があるのかといったように、蝶を越えたところの不思議を追い求めます。

さらに、そのような研究において大事なのは、原理や法則をなぜ自分は知りたいと思うのか、ということろまで研究者自身が認識していることでしょう。「私は蝶が好きだから」でやっているのは趣味。そこに留まるのではなく、日々の研究活動を通じて「なぜ私は蝶が好きなのか？」までを真剣に考え続け、例えば人間にとっての昆虫というものの存在や、生物史を踏まえた生態系における人間や自然そのものの存在の謎（不思議）に触れることが学問でしょう。いうなら研究は対象との戦いですが、学問はそれを通じた自分（＝全人類）との戦いなのです。ここまで考えるからこそ、個人の興味・関心のレベルを超えて、人間にとっての興味・関心となる。万民に通じることであるからこそ普遍であり、それは国費を投入することに値する。

しいて逆説的に言うなら、「私（研究者）の興味・関心だけ、なぜ特別扱いなんだろう・・・研究者ではない人だって私と同じ興味・関心を持つ人はいるはず。しかし、なぜ私だけが仕事としてそれができるんだろう。その違いはなんだろう。責任はなんだろう」と、一度は真剣に問うたことがある研究者のみが、あるいはその問いをずっと抱き続けている研究者のみが、その興味・関心を突き詰めるに値すると思うのです。

興味関心と課題解決、そして学問との違いは？

興味関心に従った研究と課題解決をねらう研究。いずれも意義のある営みです。しかし、筆者は大学でやるべきこと、すなわち「学問」とは区別をしたいと考えます。なぜなら、興味関心の追求はどこでもできることであり、課題解決は一般企業、あるいは国立研究開発法人（国立がん研究センターや理化学研究所など、全国に約30箇所）などの役目として特化的に実施されているからです。いうまでもないことですが、大学はそれらと異なるものでなければ、社会に存在する意味が薄いと言えます。

ここで、法令や憲法を持ち出し、研究者っぽく組織制度の違いやその成り立ちの歴史をちくちく述べるのもよいでしょう。しかし、説得はされるかもしれないが我々の常識はそれでは納得しません。学問を想っている著者としては、一つはそこに自己を疑う目があるかどうかで判断したい気持ちになります。自分がやっていること、やりたいことは結局のところ何なのだろうか。何をやっていることになっているのだろうか。そもそも自分はなぜそれに関心をもったのだろうか。このように自身の関心や自分自身というものを自分の外から見つめるような目線。それが本当の意味で「考える」ということに他ならないし、そのように考えることこそが学問だと思うのです。

興味関心の追求だろうが、課題の解決だろうが、自分はそれをやりたい、それをしなければ自分ではない。そこまで考えつめたやりたいことの発生根拠こそを考えつめよう、学問であるなら。そうすれば、その起点はなんと素朴で弱々しく、とてもとても危ういものであることに気づくでしょう。そして全く同時に、それは与えられた環境や他者との関連の中で生じたことにも気づくでしょう。では、問います。あなたのやりたいことはあなたのものですか？ 「あなた」がまず先にあるのか、「やりたいこと」が先にあるのですか？ そのやりたいことを成す容れ物としての「あなた」とはいったい何でしょうか？

このように考え続けたその果てには自分が自分でなくなる、自分とは何かよくわからなくなる地点に必ずたどり着きます。それでもなお踏み出す覚悟の一步に、人は「学問」を感じるのでしょうか。学問とはこの世の理（ことわり）、絶対的不可知に対峙したときの姿勢、生き様（よう）なのです。この世に存在する我々にとって、この世を思うこと、すなわち生きること（＝死ぬこと）を思い、それを思う自分をまた思うこと（これが考えるということ）が無駄なはずがありません。すべての根源なのですから。我々が抱えるあらゆる問題はすべてそこから湧いてきた泡のようなものなのですから。

生きること＝食うことが主目的になりがちの日常において、生きること＝食うことそのものを問い直すにはいったん生きること＝食うことから離れなければならない。それが大学という時空でしょう。これは大学において興味関心の追求や課題解決をやるべきではないということをいいたいのではありません。大学でやるからには、どのようなことも「学問」でないといけない。そうでなければ、他の組織体との区別がないのですから。